巻頭言

今年の夏は記録的な暑さに見舞われ，熱中症という言葉をよく耳にしました。また残暑も厳しく，10 月に入っても夏日を記録する所が少なくありませんでした。この巻頭言を執筆している 10 月半ばになり，ようやく秋の気配が深まってきました。しかし，季節の移ろいに逆らうかのように，尖閣諸島問題はますます熱を帯びてきているようです。前回の巻頭言でさまざまな学術活動にも影響を及ぼしていると述べましたが，私が関係している日中間の国際共同事業にも影を落とし始めたのです。打ち合わせの日程が決まらない，期日までに返事が返ってこないなど，これまでスムーズだった交渉がぎくしゃくし始めました。中国とお付き合いをし始めてから 20 年近くになりますが，このようなことはありませんでした。

そんななか，朝日新聞に投稿された村上春樹氏の提言は，解決の糸口を見いだす一筋の光のように思いました。「国境を越えて魂が行き来する道筋を塞いではならない」と述べ，さらに，「それ（領土問題に対する熱狂）は安酒の酔いに似ている。我々は静かな姿勢を示さなければ」と指摘しています。この「我々」というのは日本人だけではなく，中国人を含めてのことだと思います。村上氏は「この 20 年ほどで，東アジアの文化交流は豊かになっている。そうした文化圏の成熟が，尖閣や竹島をめぐる日中韓のあつれきで破壊されてしまうことを恐れている」とも述べています。私たちの中医学分野の学術交流も「20 年ほどの東アジアの文化交流」に含まれると思います。私たちにできること，それは政治状況に左右されることなく，東アジア文化としての中医学を発展させる努力を怠らないことだと思うのです。

さて，9 月 1・2 日に第 2 回学術総会が開催されました。会頭は東北大学の関隆志先生で，「伝統医学は医学のフロンティア――東アジア伝統医学の融合と発展の可能性」がテーマでした。本学術誌に長く連載をしていただいていた天津中医薬大学の呉深涛教授が「糖尿病の中医学的治療」について講演されましたが，私のような西医にとってもわかりやすい論理展開でした。特筆すべきは，シンポジウムだけでなく一般演題のセッションでもレベルの高い発表が数多く見受けられたことです。日本の中医学研究も着実に発展していることに，心強く思った次第です。シンポジウムの発表者には本学術雑誌への投稿を依頼しており，次号から順次掲載を予定しているのでご期待ください。

2012 年 10 月

日本中医学会理事長
日本中医学会雑誌　編集委員長
酒谷　薫